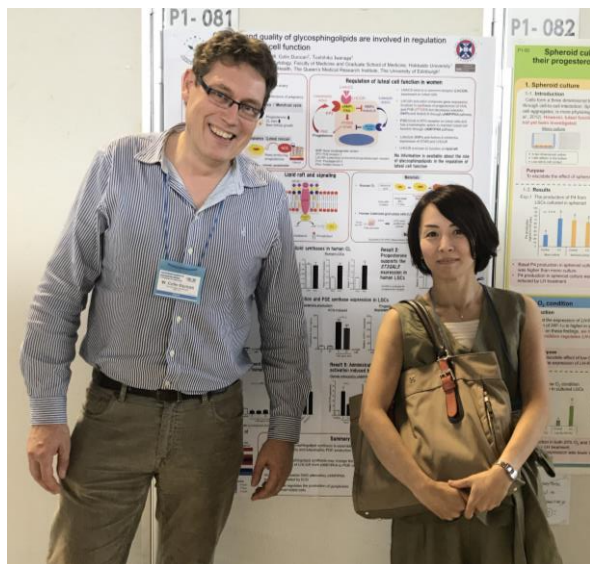


プロフィール



エジンバラ大学のDuncan教授と
(WCRB2017にて)

名前	小林（仁尾） 純子
所属部署	北海道大学 大学院医学研究院 組織細胞学教室
職種	講師（組織学）
出身地	兵庫県西宮市
趣味	動物とたわむれること 自然の中でのんびりすること

インタビュー

Q1 出身大学はどこですか。

北海道大学の獣医学部です。2002年に卒業して、その後、博士課程に進学しました。

Q2 どうして今は医学部にいるのですか？

学部学生の際に所属していた解剖学教室の岩永敏彦教授が、博士課程の途中で異動になり、医学部の教授に就任されました。私は所属は獣医学研究科のままでしたが、実験は岩永教授の指導のもと医学部で行っていました。卒業後、助教に採用していただき、現在に至ります。

Q3 現在の研究テーマは何ですか。

大学院の時から興味をもって続けているのは「糖鎖とレクチン」です。特にガレクチンというβ型結合したガラクトースを認識するレクチンに注目しています。研究を始めたころは消化管や泌尿器をみていましたが、ここ数年は黄体に注目して解析を行っています。卵巣以外の雌性生殖器や下垂体にも最近手を出し始めました。

Q4 どうして黄体なのですか。

博士課程在学中にマウスの退行過程の黄体に特異的にガレクチンが発現することを見つけました。特定の時期の黄体に特定のガレクチンが発現する、ということはわかったのですが、機能解析まで踏み込めず悩んでいました。すると、岩永教授が「僕の同級生が岡山で黄体の研究をやってるよ」と、当時岡山大学にいらした奥田潔先生を紹介してくださいました。その後、ヒトの黄体研究を行っている英国エジンバラ大学のW. Colin Duncan教授のもとに留学し、ヒト黄体のガレクチンについて解析を行いました。奥田先生やDuncan教授とディスカッションしていくうちに、黄体という組織に魅力を感じ、どんどんのめりこんでいきました。

Q5 黄体でガレクチンは何をしていますか。

実はまだよくわかっていません。ヒトやウシでは、機能黄体と退行黄体で発現するガレクチンサブタイプと糖鎖構造が変化する「ガレクチンスイッチ」があるということがわかりました。ガレクチンと糖鎖との相互作用が変わると黄体の機能に影響を与えるようです。ガレクチンが認識する糖鎖以外にも、黄体機能に付随して変化する糖鎖構造があります。黄体における糖鎖研究では、まだまだ明らかにしないといけないことがたくさんあるので、研究の興味はつきません。

Q6 解剖学ってなんかコワイんですけど。

以前、理学部から実験に来ていた学生さんに「ドアの向こうではずっと人体解剖をしている」研究室だと思われていました。が、実際にはそんなことはありません。解剖学の中でも私が担当している組織学は、顕微鏡を用いて人体の構造を理解する顕微解剖学の分野になります。医学部の実習では2年生を対象に、体のあらゆる構造物を顕微鏡で観察していきます。北大には美しい実習標本がたくさんあります。

私自身も顕微鏡で観察することが好きなので、研究手法も主に免疫染色や電顕観察などの形態学的手法が中心となります。美しい標本ができると一日中観察していても飽きません。

Q7 現在悩んでいることは。

小学1年生の娘が一人いますが、子育てと研究の両立にいつも頭を悩ませています。子育てをしながら研究を続けていらっしゃる女性研究者の方々といろいろと情報を交換したいです。

Q8 最後にひとこと。

将来は研究者になりたい！と思っていたわけではないのですが、興味があることを続けていたらいつの間にか研究者になっていました。研究テーマもひとつにこだわりすぎず、いろいろと手を出して、生命現象を深く理解していけたらと思っています。

若い学生さんには自分の興味のあることを追及していてもらいたいです。解剖学や糖鎖研究に興味のある方、いつでもご連絡いただければと思います。